

岡山県八塔寺ふるさと村の課題と展開方向

—グリーン・ツーリズム開発地区の課題と再生方策に関する事例的考察—

Case study of Hattouji Furusato Village, Okayama Pref. :

Considerations on the Revitalization Strategies for the Green Tourism Development Area

真鍋 奈津子*・星野 敏**

Natsuko MANABE and Satoshi HOSHINO

I はじめに

グリーン・ツーリズム（以下G.T）は、これからの余暇活動のあり方の一つとして、また、農山村地域の地域活性化の有望な方法の一つとして期待されている。わが国では、平成4年に政府によるG.Tの推進方策が提起されて以来、全国各地で基本構想の策定、受け皿作り等、様々な取り組みが行われてきた¹⁾。

岡山県吉永町にある八塔寺ふるさと村も都市農村交流に早くから取り組んできた先進地区であったが、年々利用者が減少傾向にあり、ふるさと村全体的にやや活気が薄れている。再び活気を取り戻すためには、都市住民のニーズを的確に捉えて、それに対応する地域資源を有効に活用した、その地域独自の交流コンセプトを確立する必要がある。また、それと同時に地域住民が一体となって主体的な取り組みが行えるような体制をつくっていくことも重要だと考えられる。

これまで、都市農村交流に関する既往研究では、全国の事例におけるG.Tの趨勢に関する研究²⁾や、地域住民の意識を分析した研究³⁾、来訪者の意識を分析した研究⁴⁾はいくつか見られる。しかし、1つの事例に対して、地元農村側の意向と来訪者のニーズの両方を調査した上で提言を行った研究は少ない⁵⁾。

そこで本報では、行政機関と地元住民等へのヒアリング調査、地域住民と都市住民によるワークショップを企画・実施、同地域の来訪者を対象とした対面式アンケート調査を行った。そこから当該地区の直面する問題点を把握し、来訪者の意見やニーズに即した地域再生のあり方を提案する。

II 対象地域の概要と現状

以下では、行政機関と地元住民へのヒアリング調査をもとに八塔寺ふるさと村の概要について紹介し、地域づくり組織と交流施設の抱える問題点を指摘する。

1 ふるさと村の概要

岡山県吉永町は岡山県の東部にあり、岡山市と姫路市のほぼ中間地点、兵庫県との県境に位置している（図1参照）。八塔寺ふるさと村は、岡山県のふるさと村整備事業によって設置された。この事業の歴史は古く、昭和49年に当時の長野士郎知事の「肝いり」事業としてはじまった。県内の優れた農村景観を保存復元し、次代に継承することを目的として、県内に7地区のふるさと村が指定された。以来、岡山県は平成12年度までふるさと村所在市町村に対して集落景観等の保全・修復事業、伝統文化の保存・伝承事業、都市との交流促進事業等の施策を講じてきた。当初の目的は概

* 神戸大学大学院自然科学研究科 Graduate school of Science and Technology, Kobe University

** 神戸大学農学部 Faculty of Agriculture, Kobe University

Key Words : 1) 都市農村交流, 2) グリーン・ツーリズム, 3) アンケート調査, 4) ヒアリング調査, 5) 八塔寺ふるさと村

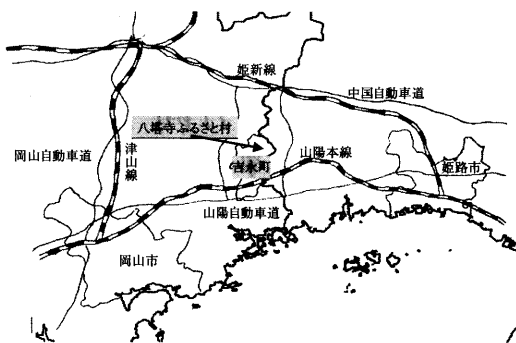


図1 吉永町八塔寺ふるさと村の位置

Fig. 1 Position of Hattouji Furusato Village, Yoshinaga-cho



写真1 八塔寺ふるさと村の田園風景

Photo 1 Pastoral landscape of Hattouji Furusato Village

ね達成されたとして、県は平成13年度から補助金の交付を中止している。八塔寺ふるさと村は、事業の始まった昭和49年に第1号のふるさと村として指定を受けた。

周りを山で囲まれた八塔寺地区は、豊かな自然資源に恵まれており、四季ごとに変化する農村風景を楽しむことができる（写真1参照）。また、約1200年前に弓削道鏡が開基したと言われる照鏡山八塔寺を中心に山岳仏教が栄え、現在でも多くの歴史的資源が残されている。これらの地域資源を活用し、各種の事業が導入されたが、特に平成9年から10年にかけて吉永町の都市農村交流構想により、八塔寺ふるさと農園、八塔寺ふるさと館（コテージ、休憩所、レストラン）などの交流施設が整備されている^{6) 7)}。各施設の平成14年度利用のべ人数は約2万9千人である。しかし、現在

利用者は減少傾向にある。八塔寺ふるさと村は、最初は県の意向で誕生し、後には町の意向によって施設整備が進められてきた。行政主導型GTの典型的な事例である。

2 地域づくり組織

八塔寺地区は、集落面積約1km²、世帯数12戸、集落人口42人の小規模な集落である。およそ7割以上が50歳以上であり、高齢化が進んでいる。ふるさと村や周辺の環境の維持・管理の活動（草刈り、清掃、間伐、水路掃除など）や、お祭り等のイベントの計画・実行は、すべて地区の自治会が主体で行っている。また、八塔寺地区で都市住民との積極的な交流を図るために、町の主導により「アグリのリづくり協議会」という組織をつくり、特産品開発や景観保全に取り組んでいる。

この協議会の構成メンバーは、自治会のメンバーと事実上同じあり、これら二つの活動を運営している主なメンバーは50代、60代の8～10名ほどの地域住民である。現在、地区内には30代、40代の人材が非常に少ないため、近い将来、地区内の人材のみで現在のような交流活動を維持できなくなることが危惧される（課題①交流の担い手の不足と高齢化）。

また、現在のところ交流活動や景観維持活動の資金は自治会の年会費と町からの管理委託料等で賄われている。しかるに、吉永町は平成17年3月に向けて市町村合併の話が進められている。現時点では吉永町が地区内の主要施設の維持管理費を負担しているが、役場でのヒアリングによると、合併後には削減される可能性が十分高いうえ、平成13年度からは、ふるさと村設置以来続いていた岡山県からの補助金の交付が休止された。よって、今後財政面では厳しい状況になることが予想される（課題③交流事業継続のための収益事業の欠如）。

3 交流施設の管理と運営の状況

前述したように八塔寺ふるさと村内には、交流を目的とした多くの交流施設（八塔寺ふるさと農園、八塔寺ふるさと館など）がある。これらの施設は、中山間地域総合整備事業、山村振興等農林

漁業特別対策事業，県境町村等振興事業などの各種事業により整備された。行政がこれらの交流施設の管理を(助)吉永町振興公社などに委託する形式をとっている。公社から施設の経営と管理を再委託された管理者(上述の地域づくり組織とは異なる個人ないし民間企業)は，施設ごとに決められた内容に従って，施設の管理作業を代行すると同時に，施設を利用してレストランなどの経営を行っている。各施設の利益が個々の管理者に帰属し，地域に還元される仕組みになっていない。その上，施設相互や自治会との連携が十分に図られていない。狭い範囲内に立地しているにもかかわらず，自治会と交流施設経営者間および交流施設相互の情報交換や共同でのイベント開催などの相互連携はまったくない(課題②交流施設相互の連携不足)。このように，各施設が独立しているため地元住民がこれら交流施設を「自分の地域のもの」という認識が生まれにくい。その結果，交流施設に対する関心が低くなる状況を生み出しているといえる。地域づくり組織(自治会)の役員さんの努力にもかかわらず，地域全体で交流施設を盛り上げようという意識は全体的に弱いと言わざるを得ない(課題④地元住民の関心が希薄)。

Ⅲ 都市農村交流ワークショップ

2003年9月25日～26日に東備農業改良普及センターと神戸大学農学部環境情報学研究室が共催で，地元住民と都市住民・学生による交流ワークショップ(八塔寺デザイン会議2003)を開催した。参加者は，地元住民13名，大学関係者(教員・学生)14名，都市住民6名，行政・普及機関(事務局スタッフ)12名である。表1はそのスケジュールである。4班に分かれて地域内を散策し，両者の視点から当該地域の良い点や問題点などを指摘し合い，これからの地域づくりの方向について提案した。

各班からの提案内容を要約すると表2の通りである。3班は，来訪者に対する情報量の不足，交流施設が十分活用されていない点を問題として指摘している。また，他の班の提案もユニークなアイデアを含んでいて，短期のワークショップとし

ては完成度の高いものであったように思われる。このワークショップを通じて，我々は当該地区の問題点と今後の展開方向に関する基礎的な知見を得ることができたが，アイデアの段階にとどまっていたため，実際の行動計画を提案するまでには至っていない。

Ⅳ 来訪者へのアンケート調査

1 調査の目的と方法

都市農村交流による地域活性化を行うために

表1 ワークショップ(八塔寺デザイン会議2003)のプログラム

Table 1 Program of Workshop
(Hattouji Design conference 2003)

第1日目 午前	・開 会 ・参加メンバーの自己紹介 ・むらづくり講演会 □□大学農学部 □□□□
第1日目 午後	・集落ウォーキング～ワークショップ 班編成の後，地元住民とともに集落ウォーキング会場に戻り，地図を用いてビジョンの取りまとめ(夕食後) ・講話 一八塔寺について— 高頭寺住職 釜本隆康 ・班別の作戦会議(～23:00)
第2日目 午前	・ワークショップ 集落ビジョンのとりまとめ ・班別発表会 ・閉 会
第2日目 午後	・ピオーネ収穫体験(八塔寺ふるさと農園)

表2 ワークショップの結果(各班からの提案)

Table 2 Result of workshop (Proposal from each group)

第1班	ワーキングホリデー型都市農村交流：中・長期の休暇を取りやすい学生にターゲットを絞り，1週間程度の滞在を前提とする交流プログラムを企画する。その間，草むしりや農作業補助を手伝いながら，地元の人たちとの交流の機会を設ける。
第2班	年代別にみた交流プログラムの整備：来訪者を年代別に小・中学生，中・高年・家族連れ，高齢者に区分し，それぞれの年代に焦点を当てた交流プログラムの整備を提案した。
第3班	来訪者への情報発信と地域住民の意識改革：看板や案内板の中に見えにくいものがあり，歴史資源の解説が十分でない。このため，ふるさと村にある施設の利用率が低く，十分に活用されていない。また，地元側に来訪者を快く受け入れる姿勢も必要。
第4班	旬にあわせて移動する交流用共有地(コモン)：来訪者と地元住民との交流用コモン(交流空間)をもうける。この交流空間は，季節毎にもっとも八塔寺の良さを味わえる「旬な場所」に設定し，都市住民に解放する。

注：文献8)より該当箇所を要約した。

は、地域住民のみの意見では、本地区に対する来訪者の期待がどこにあるのかを明らかにすることは難しい。そこで、来訪者のニーズや意見を的確に把握するために同地域への来訪者を対象として、現地で対面調査法（直接インタビュー）によるアンケート調査を実施した。調査項目は、フェイスシート、交通手段と所要時間、来訪人数、来訪回数、滞在日数、ルート、ふるさと村内での過ごし方、良い点・改善点・要望等、全部で42項目とした。2003年11月の各週末に計5回実施し、計99サンプルを得ることができた。11月に実施したのは、紅葉の時期であり多くの来訪者が見込めると考えたためである。そのため、異なる時期にアンケートを実施した場合、同様の結果が出るかは確定できない。

2 アンケートの分析結果と考察

アンケート結果を集計、分析すると以下に挙げるような来訪者の傾向と特徴が明らかになった。ここでは、全集計結果の中からそれらの傾向が見取れる集計結果を示し、考察を述べる。

(1) リピーターが少ない

表3の来訪回数の結果から分かるように、「1回目」の来訪の人が67.3%で半数以上を占めており、リピーター（2回以上訪問）の確保に失敗している。

(2) 来訪者の属性が近隣からの高齢者に偏っている

表3から年代の割合をみると、最も多いのは「50歳代」で34.3%、次に「60歳代」が21.2%と、50歳代以上の人々が半分以上を占めており、全体的に年齢層が高い。来訪人数と、来訪グループをあわせて考えると少人数の家族で来ている割合が最も多いことがわかる。これらのことから、来訪者は年配の夫婦が多数を占めることが推測される。表3で八塔寺ふるさと村までの所要時間を見ると「30分以内」が20.2%、「30分～1時間」が34.3%というように所要時間1時間以内の人が半数以上を占めており、近隣に住む来訪者の割合が高い。さらに、図2からリピーターは近隣の住民が多い

表3 アンケート調査の主な集計結果

Table 3 The main total result of questionnaire survey

項目	集計結果 (%)	
性別	①男 40.4%	②女 59.6%
年代	①20歳未満 2%	②20歳代 6.1%
	③30歳代 15.2%	④40歳代 18.2%
	⑤50歳代 34.3%	⑥60歳代 21.2%
	⑦70歳以上 3.0%	
交通手段	①自家用車 98%	②バイク 1%
八塔寺ふるさと村までの所要時間	①30分以内 20.2%	②30分～1時間 34.3%
	③1～1.5時間 25.3%	④1.5～2時間 14.1%
	⑤2～3時間 5.1%	⑥3時間以上 1.0%
来訪回数	①1回目 67.3%	
	②1～9回目 11.2%	③10回目以上 21.4%
来訪人数	①1～2人 74.5%	
	②2～5人 20.4%	③6人以上 5.1%
来訪グループ	①家族と 79.6%	②友人と 18.4%
村内での食事	①食事した 38.4%	②する予定 16.2%
	③食事しない 44.9%	
直売所の利用	①立ち寄った 65.5%	②立ち寄る予定 17.9%
	③立ち寄らない 16.7%	

注：□は、特に留意すべき集計結果を示す

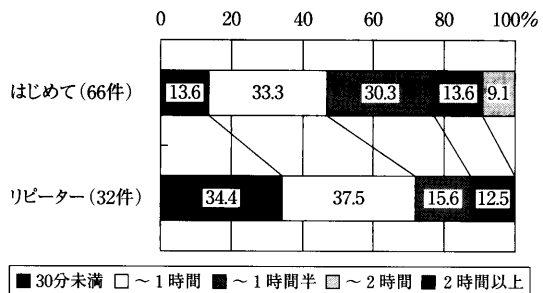


図2 来訪頻度と八塔寺ふるさと村までの所要時間の関係
Fig. 2 Relation between visit frequency and the time required to Hattouji Furusato Village

ことが分かる。来訪者の年代やリピーターの居住地域から判断する限り、来訪者の属性はかなり偏っていると云わざるをえない。

(3) ふるさと村での滞在時間が短い

八塔寺ふるさと村内には、キャンプ場を含むと5件の宿泊施設があるが、滞在日数について質問したところ、地区内で宿泊する人は居なかった。また、「八塔寺ふるさと村以外にどこかを周って行くか」という質問では7割近くの人が八塔寺ふるさと村をルートの通過地点の一つにしていることが分かった。来訪者の過ごし方としては、昼食

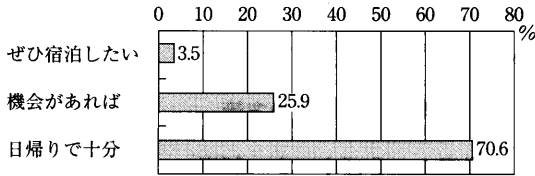


図3 八塔寺に何日か滞在してみたいか
Fig. 3 Will to stay at Hattouji Furusato Village

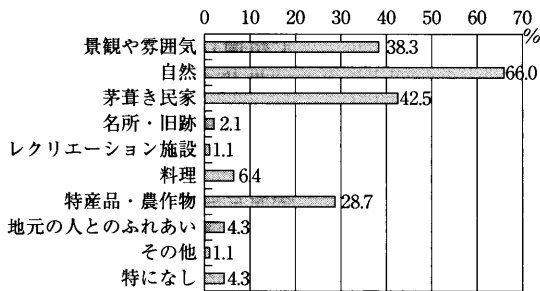


図4 特に良かったもの、良い印象をもったもの(複数回答)
Fig. 4 Especially, the one with good one good impression (two or more answers)

や直売所での買い物や地区内の散策などであり、いずれも滞在時間が短く、実際にアンケートを行った時も、昼食時間帯に当たる12時前～14時半位に来訪者が集中しており、その他の時間はほとんど来訪者が見られなかった。宿泊については「日帰りでも十分だと思う」という答えが70.6%を占めた。(図3参照)。その理由として、「長時間居てもすることがない」、「何があるのかよく分からない」ということが挙げられた。その他は「近いので宿泊する必要がない」という意見が聞かれた。これは、近隣の来訪者が多いこととも関係していると考えられる。

(4) 八塔寺ふるさと村の魅力は田園景観である

前掲写真1のように、八塔寺ふるさと村には茅葺き民家が点在し、のどかな田園風景が広がっている。八塔寺山からは遠くの景色が一望でき、山の幸が豊富など非常に自然資源に恵まれており季節ごとに見所が変化していく。図4の結果から分かるように、特に良かったもの、良い印象を持ったものについて「自然」を挙げた人が66%で最も

多く、次いで「景観や雰囲気」が38.3%という結果になった。もう一度来たいという人の理由としては、「自然や景観が気に入った」という答えが64.3%で最も多かった。また、「このまま自然を残しておいてほしい」、「一年中様々な自然が楽しめてよい」などの意見があった。このように来訪者は、視界の中に広がる自然風景と、茅葺き民家等の素朴な農村の景観の両方が楽しめる「箱庭的田園空間」を最も魅力的であると感じていることが分かる。

V 地域再生に向けての方策

1 八塔寺ふるさと村の課題

本報の狙いは、地域再生に向けての方策を具体的に提案することであるが、有効な方策を提案するためには問題点とその原因を的確に把握する必要がある。これまで指摘した問題点を整理すると以下の通りである。まず、II節では、行政機関と地元住民へのヒアリング調査をもとに、①交流の担い手の不足と高齢化、②交流施設相互の連携不足、③交流事業継続のための収益事業の欠如、④地元住民の関心が希薄などの問題点を指摘した。また、IV節では来訪者のアンケート調査をふまえて、⑤リピーターが少ない、⑥来訪者の属性が近隣からの高齢者に偏っている、⑦ふるさと村での滞在時間が短い、⑧八塔寺ふるさと村の魅力は田園景観にある等の特性を明らかにした。さらにIII節のワークショップでは、⑨来訪者に対する情報量の不足、⑩交流施設や資源が活用されていない点などを指摘した。

このうち、①交流の担い手不足と高齢化と②交流施設相互の連携不足、③交流事業継続のための収益事業の欠如(ここでは③'体験プログラムが充実していないと表現する)の3項目は、それ自体が問題であると同時に、他の問題の原因的要素であると考えられる。また、⑧を問題点として書き直すと、⑧'田園景観の維持管理ができなくなると書ける。

表4は、八塔寺ふるさと村の再生方策を提案するにあたり、T型マトリクス図法を適用して問題

一原因一方策の関係を整理したものである。Ⅲ節で述べた都市農村交流ワークショップでの提案とアンケート調査の結果を踏まえて、Aそばオーナー制度、B地域外との連携による景観維持、C交流案内板とHPの整備、D連絡協議会の設置の4つの提案をしたい。このうち前3者の提案は交流をテーマにして、地域住民と来訪者が一緒に活動を作り上げていくということを念頭に考案している。また、これらの提案は表4に示したように地

域が直面する問題（その原因）に対応したものである。

2 地域再生に向けての方策

(1) 提案A—そばオーナー制度—

ふるさと村内の交流施設の中には、そば打ち体験ができる設備があるが、知名度が低く、ほとんど利用されていない。地区内には、来訪者が参加して楽しめるような体験プログラムが無い。Ⅲ節

で指摘したように普段は若い世代の来訪者が少ないが、調査期間中の11月16日（日）に行われた「八塔寺ふるさと祭り」には、多数の子供連れの家が大根、白菜、サツマイモの収穫体験、竹細工・木工体験などを目当てに当地区を訪れている。このことから、参加型のイベントを活用することで子供連れの若い世代の家族を集められる可能性がある。

そこで、参加型の体験プログラムとしてそばオーナー制度を提案する。この地区はそばを栽培しており、飲食店でのメニューもそばが中心で、加工品もある。また、既述したように、現在ほとんど利用されていないが、そば打ち体験ができる施設や設備が整っている。そのため、この提案は地域資源の一つであるそばや、既存の交流施設を有効に活用することが期待できる。また、この地区への来訪者は近隣の住民が多く、年に数回足を運ばなくてはならないオーナー制度のターゲットに比較的なりやす

表4 T型マトリクス図法による方策の整理
Table 4 Arrangement of strategy by T type matrix drawing

④ 地域住民の関心が低い	⑤ リピーターが少ない	⑥ 来訪者の属性が近隣の高齢者に偏る	⑦ ふるさと村での滞在時間が短い	⑧ 田園景観の維持管理が困難	⑨ 来訪者に対する情報提供の不足	⑩ 交流施設が十分に活用されていない	問題		方策		提案A そばオーナー制度	提案B 地域外と連携による景観維持	提案C 交流案内板とHPの整備	提案D 連絡協議会の設置	
							原因	原因	原因	原因					
							①	交流の担い手不足と高齢化							
							②	交流施設の相互連携が不十分							○
	○	○	○				③	体験プログラムが充実していない		○					○
								八塔寺ふるさと村の知名度が低い						○	
								地域資源が有効に活用されていない			○				
								地元住民だけに依存した地域管理				○			
								案内板の老朽化しており、目立たない						○	
								交流が一部の住民のみに限定される						○	
								地域づくり組織が弱体							○

注：①～⑩およびA～Dは本文に対応する。また、①から③は原因的項目として扱う。特に関係している項目には○、やや関係している項目には△で表している

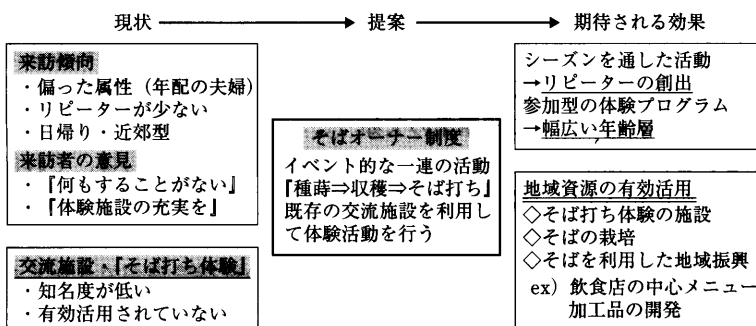


図5 提案A—そばオーナー制度—
Fig. 5 Proposal A - Nearby owner system -

いと考えられる。現在のよ
うな年に数回催されている
一過性のお祭りなどのイベ
ントとは違って、播種から
収穫、そば打ちまでシーズ
ンを通しての作業を体験し
てもらうため、周期的に来
訪するリピーターを新しく
作りだすことができる。ま
た、イベント的な内容で、
現在よりも幅広い年代の人
を集められると期待でき
る。

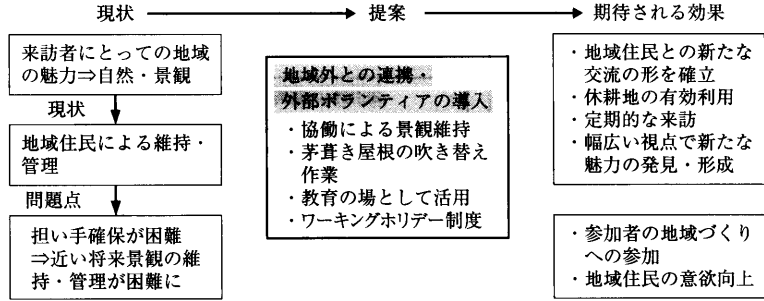


図6 提案B—地域外と連携による景観維持—
Fig. 6 Proposal B—Spectacle maintenance by cooperation outside region—

(2) 提案B—地域外と連携による景観維持—

アンケート結果より当地区で来訪者が感じる魅力的な要素は自然・景観であることが分かった。とりわけ水田は農村景観を形成する上で必要不可欠な要素である。現在、地区内の景観の維持・管理は60歳代の住民が中心となって行っている。近い将来、地域住民のみでは水田が荒廃してしまうが、それは同時に、美しい農村景観も維持できなくなることを意味する。当地区は岡山県下にあるふるさと村の中で最も指定地域の範囲が狭く、他のふるさと村に比べ人口が半分以下であるため、特に担い手の確保による参加型の景観維持を提案する。第1は外部ボランティアを募集し、アドバイザーの指導を受けつつ協働で景観づくりを行う。当地区で景観維持に必要な作業はまず畦畔や道沿いの草刈り作業である。実際、草刈り作業に対する地元のニーズも高い。第2に、茅葺き屋根の葺き替え作業である。当地区では茅葺きの家屋は重要な景観要素であるが、葺き替え作業は非常にコストのかかる作業である。これを専門家、地元住民、都市住民や学生のボランティア等との協働によって実施する。そして、第3は、農地については小学校との連携によって食農教育等の教育の場として積極的に活用する。いずれの場合においても、単なる作業プログラムだけでなく、参加ボランティア・児童と地域住民との交流プログラムを組み入れた企画とする。これらの活動の際には、参加者が一定期間地域に滞在しながら作業を

行うワーキングホリデー制度も併せて実施することも提案する。

このような交流によって、外部者の幅広い視点を導入し、新たな地域の魅力発見につながるだけでなく、地域住民と来訪者との間にある「魅力的な景観」についての意識の溝を埋めることができる。

このような一連の取り組みには、地域内の自然資源を持続的に維持・管理するという実務的な目的だけでなく、外部からの参加者がこの地域を支えているという意識（効力感）形成の目的、そして地域住民の地域づくりや交流に対する意欲向上の目的がある。

(3) 提案C—交流案内板とHPの整備—

交流を掲げる地域であるならば、案内板は必要不可欠な設備である。現地での最良の情報源はその土地にある案内板であり、来訪者が地区に到着するとまず案内板を探し、その後の行動を決める。案内板はいわば地区の顔である。しかしながら、当地区の案内板は立地が悪く目立たない。しかも老朽化がめだつ。対面調査の折りにも、「PR不足でどこに何があるのか分からない」、「施設の場所、目的が不明」といった来訪者の意見からも明らかのように、地区内に関する情報の不足が大きな問題となっている。地区内での滞在時間が短いという傾向の原因の一つではないかと思われる。

このような理由から、まず、地区内の人目のつく場所に、有効な情報源になる案内板を設置することを提案する。一旦作ってそのまま設置してお

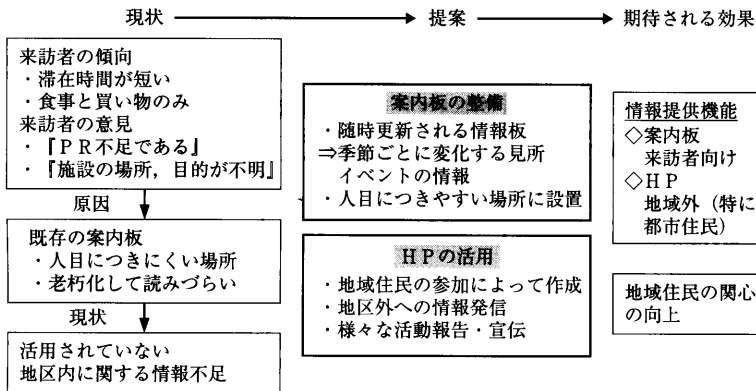


図7 提案C—交流案内板とHPの整備—

Fig.7 Proposal C—Exchange guide board and Maintenance of Web site—

くだけの案内板ではなく、地域住民によって随時更新される情報掲示板にする。特に当地区の場合には、季節によって見どころが変化するので、「旬な情報」をアピールする必要がある。また、その時期に開催されるイベントの情報等もあわせて掲載する。これは手作業によるアナログ的な掲示板であるが、その方が農村景観にマッチして良い。

地区内に設置するものの他に、上記の提案A、Bに関しては地域外（特に都市住民）への情報発信機能が必要である。そこで、インターネットのホームページを情報案内板として活用する。外部者の支援を前提に当地区のHPを開設し、当地区の見どころをPRするとともに、イベントの予定、参加者の募集、活動報告等の情報を掲載していく。地域の活動を来訪者に伝えることによって、PR効果も加わり、地域内での活動の参加者が増加することが期待できる。この場合、地域住民の手によって作成されるページを作成し、参加型のHPづくりを行っていく。現在、都市農村交流への活気がやや薄れている原因の一つとして、地域住民の参加が少ないため、活動に対する関心の低さが挙げられる。そのため、このように住民参加型のHPづくりによって、地域住民の関心が高まり、活動に対する活気が生まれることが期待できる。

(4) 提案D—連絡協議会の設置—

交流事業の受け皿組織として、「アグリのリづ

くり協議会」という地域づくり組織が設置されているが、そのメンバーは、八塔寺地区の住民に限られている。また、住職が営む民宿をのぞいて、交流施設はメンバーにはない。地区内の人材のみでは、近い将来現在のメンバーの高齢化により、現在のよう活動を維持できなくなる恐れがある。地区内の他の交流施設や八塔寺地区に隣接する集落住民の参画をあ

おぎ交流活動の担い手を拡大し、強力な連絡調整組織の設置が求められる。

VI おわりに

本報では、岡山県八塔寺ふるさと村を対象地区として、地域再生のあり方を提案したが、その特徴は以下の通りである。

第1に、現地へ再々足を運び綿密な調査を踏まえて方策を提案した点である。来訪者へのアンケート調査は実質的には個別インタビューであり、設問以外の生の意見もその都度ヒアリングしている。また、都市農村交流ワークショップでも参加者は非常に濃密な議論を展開した。各提案の基本的なアイデアは、これらの調査結果の両方を踏まえて提案したものである。

第2に、この計画づくりの過程で、我々外部者は地元住民と能動的な交流関係を構築するよう意図した点である。都市農村交流は、一時的なものではなく持続的な活動でなければならない。そこで、提案では、交流を通じて来訪者（都市住民）と地域住民が共に地域づくりに参画できることを目指す内容にした。「八塔寺ふるさと村を訪れること」が「何らかの地域づくりに関わること」につながれば、地域住民だけでなく、様々な人によって維持され続けることの可能性が広がると考えたのである。

第3に、対象地域はGT事業が全国的に推進さ

れる前にスタートした先駆的事例である点である。行政がハード施設を整備しているが、地域住民による施設の利用や運営が追いついておらず、さらに過疎化・高齢化によって地域活動を維持していくのが困難になっている。今後、多くの地域が本地区と同様の問題に直面することが予想される。しかし、このような交流の歴史のある地域では、地域住民や行政など関係者が思いつくような方策のアイデアは既に実施されていることが多い。交流活動自体がマンネリ感と閉塞感があると言える。このため、従来の発想を越えたアイデアや方策を創り出す必要があると期待されている。

本研究では、調査対象者を行政機関、地域住民、来訪者、都市住民として、多角的な視点を取り入れた。また、調査方法も1つの地域に対してワークショップ、ヒアリング調査、アンケート調査といった多様な方法をとることで、1つの方法で調査を行うよりも、1つの事象に対して多方面から考えを探ることができた。それらを集約することにより、従来にはないユニークな方策を提案することが可能になると考える。

なお、本研究の成果は地元関係者へも逐次報告している。現在、提案Aについては前向きに検討を頂いている。また、提案CのHPについては2005年3月に開設されたことを付記する(<http://home.kobe-u.com/pastoral/hattoji/index.html>)。

【謝辞】

本研究は、八塔寺ふるさと村デザイン会議（主催：岡山県東備農業改良普及センター＋神戸大学農学部環境情報学研究室）を契機として実施した。同センターで企画・運営を担当された長尾淳子氏、八塔寺ふるさ

と村役員の丸尾 貢氏、釜本隆康氏、吉永町役場の松山忠義氏ほか、関係各位に御礼申し上げる。また、地域調査のために文科省科学研究費補助金（基盤研究（B）（1））、課題名：中山間地域における農村環境整備の計画手法に関する研究、代表者：松本康夫岐阜大学教授、課題番号：15380162）を使用したことを付記する。

引用文献・参考資料

- 1) 農業土木学会編（2003）：『改訂農村計画学』pp.234-239、農業土木学会
- 2) 齋藤雪彦、中村攻、木下勇（1998）：『グリーンツーリズムの趨勢に関する研究』、ランドスケープ研究、61(5)、759-762
- 3) 本庄宏行、三橋伸夫、藤本信義（2000）：『都市農村交流活動の展開と住民意識—新潟県小国町を事例として—』、農村計画論文集、2、277-282
- 4) 中島正裕、千賀裕太郎、齋藤雪彦（2001）：『農村地域における観光資源に対する来訪者の評価分析—長野県飯山市「なべくら高原森の家」を事例として—』、農村計画学会誌20(3)、197-202
- 5) 星野 敏（2003）：『都市住民の都市農村交流ニーズに関する研究—神戸市北区Ka地区での村づくりを事例として—』、農村計画論文集、5、229-234
- 6) 岡山県東備地方振興局：『八塔寺ふるさと村パンフレット』
- 7) 吉永町・吉永町観光協会：『八塔寺ふるさと村パンフレット』
- 8) 東備農業改良普及センター・神戸大学農学部環境情報学研究室共編（2003）：『八塔寺ふるさと村デザイン会議 ワークショップと調査研究の記録』
- 9) 持田紀治編（2002）：『グリーン・ツーリズムとむらまち交流の新展開』p.285、家の光協会
- 10) 宮崎 猛 編著（2002）：『これからのグリーン・ツーリズム』p.249、家の光協会

Key Words : 1) Rural-Urban exchange, 2) Green Tourism, 3) questionnaire survey, 4) hearing survey, 5) Hattouji Furusato Village

(2005年1月17日 受付)

(2006年1月30日 受理)